
光射す方へ・・・【東方小説】

御音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光射す方へ・・・【東方小説】

【Nコード】

N1976BA

【作者名】

御音

【あらすじ】

一期一会を大切にする大学生、田口啓祐。

人との出会いは時に華麗、時に残酷。

その人の人生を大きく変えることもある。

共に辛い思いをし、共に惹かれ合う。

全ての始まりは出会い、今ここに人生の始まりが訪れる。

第一話 「一期一会」

人との出会いは一期一会。

あなたと出会えたのも奇跡かもしれない、実は運命だったのかもしれない。

ただ、これだけは言える。

”あなたと出会えて本当に良かった”と・・・

カーテンから差し込む光、部屋中に鳴り響くアラームの音。

小鳥の囀り・・・は流石に無いか・・・

俺は寝不足で疲れ切った体をゆっくりと起こす。

誰もいない殺風景な部屋、真ん中に机がポツリと置かれている。

このアパートには部屋が3つあり、リビング兼寝室と物置、そして空き部屋にしている。

ブー、ブー・・・

机に置いてある携帯が鳴り響く。

俺は背中に思い岩でも背負っているかのような速度で携帯を手にとった。

二つ折りの携帯を開き、その画面に表示されている項目に目をやる。

”おはよう諸君！本日も朝から晴天で気持ちが良いな！

今日は特別講義があるらしく、各自筆記用具とメモを取れる物を用意することだそうだ！

ということだ俺は支度をしなければな。また大学で会おう！”

見るなり神速の如く携帯を閉じる。

相変わらずのテンションはメールにまで及んでいるらしい。

そう思いつつもこういうお知らせには感謝している。俺は普段からメモを取らないからな。

ベッドから降り洗面所へ向かう。

青色の歯ブラシを手に取り歯を磨く。

当たり前のことだがそれでいい。

「・・・・・・・・眠い」

歯を磨き終え俺はポツリと呟く。

言ったところで眠気が覚めるわけではないのだが、寒いときに寒いと言ってしまうようなものだ。

寝癖をドライヤーで整え、今日着ていく服をタンスからあさる。

「これは昨日と似てるし・・・・・・・・これは、んー・・・・・・・・」

大したセンスも無いのに悩みに悩む。

結局選んだのは無難な感じのだった。

それを急いで着込み、大学へ持っていく物をカバンに入れ始める。朝ご飯は食べない・・・そもそも食べている時間が残されていない。支度を済ませ、玄関に放りっぱなしの靴を急いで履く。

「・・・・・・・・行ってきます」

電車を乗り継いで大学前に到着する。

朝の通勤、通学ラッシュ時ほど電車が地獄に思えることはないだろう。

服のシワを軽く伸ばしながら大学へ歩く。

見知った顔もあれば見知らぬ顔もある。

当然だろう、今はまだ5月。

一か月で新入生全員の顔を覚えれるほど俺には記憶力は無い。

「あの子は　であの子は　。 あんこは・・・って、 あんこってなんだ？」

隣でぶつぶつと呟く馬鹿は無視するのが一番だと知っている。

俺は大学の方を向きながら静かに足を進める。

「俺の心は真つ黒なのに空は青い・・・その清々しさを少しは分けてくれよ・・・」

「なら分けてあげよつか？」

後ろからひよっこりと声をかけられる。

河野美佐子、中学までと大学からの同級生だ。

未だに後ろでブツブツ呟いている馬鹿と3人でよく遊ぶ仲間だ。

「今日も馬鹿は平常運転なの？」

見ての通りだとジェスチャーで示す。

ただ指で指すだけで分かってくれるほど日常的な風景と化したのだらう。

馬鹿は放っておき、俺は美佐子と2人で大学へ向かうことにした。

こうして誰かと共にいるということは良いものだ。

1人ほど辛くて孤独なものはないからな・・・

「ほら、また暗い顔してる」

美佐子に言われて自ら頬を抓ってみる。

確かに暗い顔をしていたのかもしれない・・・でも仕方がないことなんだ。

俺は深く深呼吸をし、ふっと体に力を入れた。

「うん、それでこそ啓祐だね！やっぱりしゃっきつてしてる方が良いと思うよ」

こうして話せる相手がいることに感謝したい。

俺の座右の目は一期一会。人との出会い、関わりは一瞬たりとも大事にしようと心がけている。

「もうすぐ着くよ！先行ってるね！」

そう言って走っていく美佐子。

俺はその後ろ姿をボーと眺めつつ、トボトボと大学へ歩み始める。

この大学に入学して早2年が経つ。

最初こそ不安で押し潰されそうだったが、今の生活を送れているのは美佐子と慶一のおかげと言っても過言では無い。

人との出会いは大切、そして出会えた人に感謝。

俺は少しだけ顔を上げ、大学の門をくぐった。

ここは日の光が届かない地底。
地上から深く深く、まるで避けられる、避けているかのようにできた街。

地底の繁華街、そして地霊殿。
妖怪ですら恐れる少女、その妹。
八咫鳥、猫耳の妖怪。

数々の人間とは違った生き物が住む世界、幻想郷。

「でねでね、あの巫女がそんなことをしてたの」

白髪の少女が紫髪の少女に楽しそうに話しかける。
それを横目で聞く紫髪の少女。
回りには数々のペットがわいわいと騒いでいる。
ここが元地獄だなんて誰が思うだろうか。
少なくとも過去を知らない人物はそうは思わないだろう。

「・・・こいし、少し出掛けるから留守番宜しくね」

「出掛けるの？どこ？」

こいしと呼ばれる少女はまるで子供のように行先を訪ねる。
紫髪の少女はそれを軽くあしらひ、スウ　と部屋を出て行ってしまった。

そう、まるでもう戻ってこないかのように。

「こいし様、さとり様はどちらへ？」

「分からない。お姉ちゃん何も教えてくれなかったもん」

いじけた子供のようにソファーに寝そべるこいし。

隣では猫耳の少女がちょこんと座っている。

火焰猫燐、地霊に住む妖怪。

その容姿から誰が妖怪と思うだろうか？しかし妖怪ということに変わりはない。

「さとり様帰ってくるのでしょうかね？」

お燐は首を傾げながらそう呟いた。

彼女も薄々気になっているのだろう、さとりはもう帰ってこないのではないかと。

こいしだって気になってないわけではない。

「帰ってこないときはその時だよ。あいつが現れたらそれだけの事態ってこともね」

特別講義だからと期待していたのが馬鹿だった。

大した内容でもなく、自分が思う将来にはとても役立つとは思えな

かった。

それでもメモは取らなければならない。レポートという地獄が待っているのだから。

「だるいつたらありやしねえぜ・・・啓祐、終わったらカラオケでも行かないか？」

慶一の誘いに断ったことは無い。

俺のバイトのシフトに合わせて遊びに誘ってくれる優しい奴だからだ。

勿論、美佐子も誘うつもりなのだろう。

いつも3人で遊び、3人で笑い合う。

これほど楽しい人生が他にあるのだろうか？

少なくとも俺はそんなものは知らない。

「うーん・・・悪いけど今日はパスするよ」

断ったことは無いのだが、今日だけは何となく乗り気じゃなかった。

慶一は「そうか」とだけ言い残し講義室を出て行った。

明日もバイトは休みなので明日にしようと思はれ、ノートを抱え講義室を出る。

今日の帰りは1人。そう、何となく決めたのが事の始まり。

慶一と美佐子に別れを告げ、俺は1人で帰路に就く。

駅までの道のりを歩き、がやがやと鳴り響く商店街を通り過ぎる。運良く駅に着くとすぐに電車が到着した。

時間帯が少しずれているらしく、車内はガラツと空いていた。椅子の端に座り、乗り換えの駅まで寝ることにした。少しだけ・・・少しだけ眠ることに・・・

（次は 駅、 駅で御座います）

車内に響くアナウンスで目が覚める。

どうやら目的の駅に着くらしい。

慌ててカバンを掴み、扉の前に移動する。

扉が開けば外に出、向かいのホームで電車を待つ。

毎日繰り返していれば間違えることは殆ど無い。

電車が来るまで少しだけ時間がある。

ブー、ブー・・・

ポケットに入れてある携帯が震えだす。

誰だろうと携帯を出し、二つ折り状態の携帯を開いた。

画面には美佐子の文字、そう、大学の同級生河野美佐子からのメールだった。

”遊び断るなんて珍しいね

明日もバイト無いんでしょ？明日は3人で遊ぼうね”

ありがととだけ打ち込み返信する。

いちいち気を使ってメールを送ってくれるのだから無視は失礼だ。

メールの文面を見ながら感謝しつつ、ホームに到着した電車に乗り

込む。

自宅まで後10分程度だろう・・・帰れば晩御飯の支度が待っている。

といっても冷凍食品を温めるだけなのだが・・・

電車を降りれば自宅までは後少し。

少しの道のりがとても長く感じるが、歩かなければ自宅にが着けない。

仕方なくトボトボと足を進める。

カーブミラーの無い小さな交差点を過ぎ、自宅のアパートが見え始める。

アパートの前、トの交差点に差し掛かる。

俺は座右の目が一期一会だと言った。

一期一会とはとても大切に意味のある言葉だ。

それと同時に、恐ろしいものもある。

人との出会いは必ずしも良いことばかりではない。

自分にとって不都合な出会いもあるだろう。

それでも俺は一期一会を大切に続ける。

そう、こうして何気に帰ってきた今も・・・

ドンッ！

誰かと体がぶつかる。

少しして顔を上げ、ぶつかった相手を視界に捉える。

これが全ての始まり、俺の人生を180度変える出来事の始まり。紫髪の少女との出会いでも会った。

「・・・・・・・・変・・・・ですか？」

彼女はこう言い放った。俺は何も言っていないのに。

「別に・・・・変ではないですよ。むしろ・・・・似合ってますよ」

何気に言ったこの言葉が始まりだった。

何に対して似合っていると言ったのかは定かではない、服装かもしれないし髪型かもしれない。

しかし、彼女には全てが筒抜けだった。

俺が口から言わずとも全てを分かっており、言う必要が無かった。

「・・・・いきなりで失礼なのは承知の上ですが・・・・その・・・・泊めてもらってもよろしいでしょうか？」

人生が変わった瞬間だった。

第二話 「事の始まり」

大学での講義が終わり帰宅した。

いつもと変わらぬ風景の部屋。

冷凍庫から晩飯用のお好み焼きを2つ取り出し、皿に乗せて温める。俺は普段から大食いだはない。それでは何故2つも温めているのか。理由は簡単だ、部屋を見てもらえばすぐに分かる。

「（・・・・・・・・何が起こったのだろうか）」

内心の俺はとても困惑している。

別に一人暮らしだから1人増えようがどうってことは無いのだが・

・

部屋の中心、そこに置かれた机の前にチヨコンと座る紫髪の少女。どう見ても20歳にも満たない少女なのだが・・・

「お好み焼きとは何でしょうか・・・」

何も聞く前に聞かなくてもと焦ってしまう。

この少女、名は古明地さとりと名乗った。

俺の思うことを俺自身が言う前に言われてしまう。まるで俺の心を読んでいるかのように。

不思議を超えた不思議な少女だと俺は思う。

先ほどアパートの前の曲がり角でぶつかった後、突如泊めてほしいと言い出した。

話を聞く限りじゃ別世界らしき場所から来たらしい。

知り合いなどいるはずもなく、たまたま居合わせたのが俺だったの。で俺に頼んだ、そうらしい。

本当かどうかはさて置き、流石に幼い少女を外に1人でいさせるわ

けにはいかない。

変な誤解をされては困るが、そこまで鬼だとは自分では思っていないつもりだ。

「大阪の名物ですか・・・一度食べてみたいですね・・・」

答える必要が無いのはとても楽なのだが・・・少し怖いぐらいだ。彼女、古明地さとりは何でも先に口走る。

俺の考え、思考、全てを読み取り全てを悟っている。そう、悟り。

「・・・・・・・・さとりさん、だっけか」

「はい。古明地さとりです」

こうして稀に会話が成り立つ時もあったりする。

彼女に対していくつもの・・・日が暮れても終わらぬほどの質問があると思う。

全部をぶつけていては時間が足りない、それに彼女にも失礼だろう。俺は手短に、しかし重要な部分だけを再度質問として聞くことにした。

「まずはその幻想郷という場所について知りたいかな」

彼女が言うには幻想郷は近くて遠い世界らしい。

らしいというのはやはり俺自身が完全に信じていないから。

見たことも聞いたこともない世界から来たなんて誰も信じないだろう。

そしてその世界には人間以外の生物、妖怪や吸血鬼、果ては神まで存在するらしい。

本当に幻想郷が存在するならば、これほどの世界を揺るがす事象は無いだろうな。

「そして私は幻想郷、その地底にある地霊殿という場所に住んでいました。こうして外界にいる原因は分かりませんが・・・」

さとりはそう説明する。ぎこちなく。

喋り方自体にはまったく問題は無い、むしろ丁重かつ親切な説明だと思う。

ただ、視線がチラチラと移動している。定まっていない。まるで緊張している、オドオドしているかのようだ。

「それと、さとりさん自身についてなんだけど・・・」

ビクツとさとりの体が震える。

まるで怖がるように、トラウマが蘇っているかのように。

その目は極限にまで潤んでおり、今にも涙の粒が零れそうな脆い瞳。変わった人だなと思いつつ、俺は2つ目の質問を投げかけた。

「とりあえず年齢だけ教えてもらっていいかな？失礼なのは分かっているけど知っておかないと色々と大変なんです」

「ね・・・年齢ですか・・・」

拍子抜けしたような表情でこちらを見据えるさとり。

やつのことで視線が合ったと思えば、今度は困った表情をする。感情が顔に出る人なのだろうか・・・

「年齢は・・・その・・・」

実は童顔で20歳を超えているから言うのが恥ずかしいのか。それとも女性として年齢を暴露するのが恥ずかしいのか・・・

何れにしてもこれ以上聞くのは心が痛んできた。

俺は困惑し、顔が紅潮しているさとりにこう言った。

「まあ年齢はいいよ。ごめんね、失礼なこと聞いちゃって」
そう言っただけで温めが終わって冷めているであろうお好み焼きを再び温める。

これは俺の直感かもしれないが・・・さとりは人と関わるのが苦手なのかもしれない。

それ以前に、幻想郷がどういう場所なのか俺には分からない。もしかしたらさとりは妖怪に囲まれて過ごしていたのかもしれない。少なくとも彼女は人間なのだろうが・・・

時は数時間進んだのだろう。

外は既に街灯の明かりのみとなっていた。

まだ季節が春なので虫もそういるわけもなく、心地良い夜風が網戸から入り込んでくる。

部屋にはテレビから流れる音声が響いており、そのテレビに釘付けになるさとりもいる。

普段は俺以外いないこの部屋に誰かがいるというのはとても違和感がある。

かといって追い出すというわけでもない。何もしないならいてもらっても構わない。

・・・馬鹿を泊めたら色々と言われそうで嫌なのだが。

「（・・・・・・・・不思議といえば不思議なんだけどな・・・・・・・・）」

彼女は何かを隠している。

その隠し事が何かは分からない、ただ何かを隠しているのは事実だろう。

オドオドとした雰囲気があるのを物語っているし、まるで人と関わるのを避けるかのような感じもそうだ。

彼女は人が嫌いなのだろうか・・・・俺には分からないが。

「さとりさん」

「は、はい・・・・・・・・何でしょうか・・・・・・・・」

この反応、驚いているというよりは怖がっているようだ。考えても埒は明かないのでとりあえず流すことにする。

「何か困ったことがあったら言ってね。俺も出来ることはするから」

会って半日すら経っていない相手に何故ここまで優しく接するのか。単なる社交辞令なのかもしれない。

それか・・・・俺の過去のせいなのかもしれない。

とにかく、さとりがいる間は不自由をしないようにしなければ。

「ありがとうございます・・・・・・・・」

不器用な笑みがほんの僅かだか漏れる。

まるで頬の筋肉が引き攣ったような笑みだったが、本人なりに頑張ったのかもしれない。

それに・・・・何だか嬉しい。

「とりあえずさとりさんの寝る部屋だけど・・・空き部屋が1つあるんだ。そこにこのベッド持っていくからそこでいいかな？」

「え、あ・・・でも・・・あなたのベッドじゃ・・・」

オドオドするさとりだが、俺は強引に話しを進める。

とりあえずベッドは持つていくことにした。押し入れに布団があるからベッドが無くて寝れる。

問題は服やその他もろもろだ。

俺は男、ましてや女性とお付き合いなんてしたことがない。

美佐子は友達だし、慶一は論外に等しい。

「んー・・・そうだ」

俺は閃いたように頷く。

しかし、出会って間もない彼女と買い物に行くなんていいのだろうか。

彼女は人との関わりを極端に嫌っているみたいだし・・・

とりあえず聞くだけ聞いてみることにした。

「明日講義が終わったらさ、さとりさんの服とか日用品を買いに行こうと思うんだ。どうかな？」

お金についてはあまり追及してほしくない。いちいち気にしてもらっては埒が明かないからな。

さとりは困った表情をするも、無くてはならない物もあるのだろう。僅かだが首を縦にコクリと振ってくれた。

「うん。じゃあ明日の夕方は近くのデパートにでも行こうか」

そう言って俺は折りたたみの出来るベッドを部屋から部屋へと運び始める。

キャスターがついているので移動はとても楽で便利だ。

さとりはベッドを運ぶ俺をじっと見つめ、視線を合わせようとする
とフィツと逸らしてしまう。

人が嫌いなのか、恥ずかしがり屋なのか・・・よく分からない。

アパート前の道は街灯と月明かりで照らされている。

網戸から入り込む夜風に当たりつつ、俺は缶チューハイの蓋を開けた。

静かになった室内で1人酒を飲む。

「・・・・・・・・・・はあ」

何だか疲れた一日だった。

どこから来たのかも分からない少女、古明地さとり。

急に泊めてと言われたときこそ驚いたが、今となっては自然になりつつある。まだ半日も経ってないが。

人間の適応力にはつくづく驚かされる。

「これからどうなるんだろうな・・・」

誰も答えない、1人しかいないのだから。

そんな中でも呟いてしまう。やはり不安はある。

日本に住む以上、住民票や税など色々と面倒な部分がある。

さとりはそういう物には登録なんてしていないだろう。
もし追及されたらどう答えたらいいか・・・まったく分からない。
しかし、いちいち気にしては骨が折れる。

「いいよな別に・・・仕方ないもんな」

そう思いチューハイを一口、二口飲む。

度数の低いチューハイなので明日の講義には問題は無い。

俺はそれを飲み干し、臨時で敷いた布団に身を包めた。

そして静かに目を閉じる。

また明日がやって来る。いつもと変わらぬ明日が・・・

第三話 「感情の意味」

薄暗い部屋の中、1人ベッドに横たわるさとり。

妖怪には寝る必要がない、睡眠など取る必要がない。

彼女はそのまま寝なくても生きられる。妖怪なのだから。

「（・・・理解、できません・・・）」

彼女は人間が大嫌いであり、人間も彼女を心底恐れている。

自らの心を読む力によって人間はおろか、妖怪にまで恐れられるようになる。

私を好き好んでくれるのは動物達、そう、地霊のペットだけ。

そう思っていた・・・

「（あの人間は・・・）」

少しだけ心を読むのをやめてみた。

いつもなら心を読み、相手の思考を先に暴露することで脅かしたりしていた。

しかし、相手が何を言い出すのか分からなければ相応のスリルのようなものがある。

人間が嫌いということもあって・・・

「（・・・明日が・・・楽しみです）」

人間との初めてであろう交流。

さとの胸はまるで遠足前の子供のように高鳴っていた。

そう、体が火照り、顔が紅潮し・・・

それはまるで恋する乙女のように。

しかし、さとり自身はそれに気づかない、分からない。
この感情が後に残酷な未来を招くということも・・・

朝日は容赦なく俺の体を襲う。

毎日のように眠い体を起こし、洗面所へ向かう。

朝ご飯の良い匂いが漂う中、俺は眠い目を擦って歯を磨きはじめ・・・

「（・・・良い匂い？）」

ふと疑問が頭に浮かぶ。

それと同時に、誰が何をしているのかある程度予測がつく。

俺は歯を磨き終え、すぐさま台所へ向かった。

湯気がもくもくと上がる白ごはんに味噌汁。

とろとろ半熟のオムレツ、そして良い感じに焼けているソーセージ。
一体誰が作ったのだろうか。答えは1つしかない。

「さとり・・・さん？」

まじまじとコンロと睨めっこをするさとり。

エプロンこそつけていないが、その姿は初々しい夫婦の妻のよう。

さとりに料理スキルがあったのかと感心し、早く食べてみたいという衝動に押されてしまう。

「お、おはようございます・・・その・・・よかったら、どうぞ・・・」

よかつたらなんて勿体無い、俺はすぐさま箸を取り出しさとの手料理を食べ始める。

朝ご飯なんて滅多に食べない。食べるといってもパンかご飯だけだ。たまに早起きをしれみればこんなに美味しい朝ご飯が食べれるなんて・・・俺は何て幸せ者なのだろうか。

あまりの美味に俺は周りが見えなくなっていたのかもしれない。さとりさんがお茶を持ってきてくれたその時・・・

ガシャンツッ！・・・・・・ドンツ！

足を滑らせたのか、お茶の入ったコップを盛大にまき散らすさとり。そして俺目掛けて飛んでくる。

勿論、気付くのに数秒を要した俺に回避の余地など残されていたのだろうか・・・ない。

「うおっつー！！」

回避が出来ないなら受け止めるしかない。

俺は無理に体を捻りさとりを受け止めた。

受け止めた反動で椅子がひっくり返り、俺もさとりも床へ投げだされる。

「痛い・・・そして柔らかい・・・」

後頭部を床に強打したのか、じんと痛みが増してくる。

そして右手、俺の右手が柔らかい物をふにつと掴んでいる。

最初こそ理解できなかったものの、徐々に何を掴んでいるのかが鮮明になってくる。

と、同時に脳裏に危険の一文が浮かぶ。

冷や汗をかき、目を見開いたその時ツツ！！

バシンツツ！！

「おはよう。何だか今日顔色悪くない？」

となりで美佐子が話しかけてくる。

顔色が悪いも何も・・・左の頬を見てもらえば全てが分かる。
真っ赤に腫れ上がり、その腫れた後は誰かの右手のよう。

「夫婦喧嘩でもしたの？」

「誰が夫婦だ喧嘩だ・・・そりや俺だって悪いさ。非は認める。でもあんなに思いつきり殴らなくてもさ・・・」

腫れ上がる左頬をさすりながら大学の門をくぐる。

今日はこれといって特別な講義もなく、いつも通りの講義だけだ。
居残りすることもそこまではないだろう。

残ると言えば井上教授が面倒をみてくれるだろうけど・・・

「じゃあね。私先に行くから」

そう言つて先に講義室へ向かう美佐子。

いつもの如く、その背中をボーと見つめていた。

後ろではこれまたいつもの如く馬鹿がぶつぶつと呟き、そしてメアドを聞いては断られるの繰り返しだった。

・・・今日も平和な一日になりますように。

講義が終われば俺は一直線に自宅へ向かう。

美佐子と慶一には事前に断りを入れておいた。

最近付き合いが悪いなどどうこう言っていたが、そこは何とか分かってもらった。

俺は珍しい私用の為に帰路を急ぐ。

「ったく・・・何でこんな時に限って電車は延着、しかも満員なんだよ・・・」

乗車率120%の電車に揺られようやく自宅前まで辿り着く。

部屋の明かりはまだついていて・・・さとりは準備しているだろうか？

俺は慌てて階段を上りドアノブに手を差し伸べた。

「ただいま・・・さとりさん？」

返事がない。

そもそもただいまという単語を発したのが何年ぶりだろうか・・・靴を脱ぎ、室内をキョロキョロと見回す。

誰もいない・・・するとある一室が頭に浮かぶ。

まったく言っていないほど使っていなかった空き部屋。

今となつてはさとの寝室。そこを覗くことに・・・

「・・・・・・・・何と・・・」

スースーと寝息を立てるさとの姿がそこにあった。
疲れて寝てしまったのだろうか・・・起こすべきか悩む。

とりあえず軽く体を揺さぶってみた、が、起きる様子は全く無い。
どうしようかと迷っている最中、さとりがもごもごと何かを口にす
る。

何を言っているのかは分からない。ただ、はっきりと聞き取れた部
分だけある。

それを聞くなり俺の心の中はシェイクされたかのようにぐちゃぐち
やになる。

いや、俺だけじゃない、それに一番辛いのはさとり自身だ。

「・・・あつ・・・私寝ちゃった・・・」

目が覚めるなり慌てて起き上がるさとり。

突然起き上がったせいで眩暈がしたのか、ふらつと体を揺らす。
慌ててそれを受け止め、軽く背中をさすってやる。

「す、すみません・・・お出かけの方は・・・」

「ん、ああ。行こうか。さとりさんは用意大丈夫？」

コクリと頷くさとり。

俺は車のキーと家の鍵をポケットに入れ、靴を履く。

施錠を確認し、アパート裏に止めてある愛車の下へ急ぐ。

ここ数日乗っていなかったせいか、少し埃を被ったような感じがあ
るが・・・

「これは・・・」

巨大な鉄の塊を前に啞然とするさとり。

話しによれば幻想郷は技術がかなり遅れているらしい。

車というものを見るのが初めてなら驚いても仕方ないだろう。
鍵のボタンを押し車の鍵を開ける。

助手席の扉を開け、こちらから乗ってくださいと説明をする。

恐る恐る乗り込むさとりを見て少しばかり笑みが零れてしまう。

「さてと、行こうか。」

キーを差し、エンジンを始動させる。

アクセルを踏み、軽快に鉄の塊は動き始めた。

目的地のデパートへと進みだす。

そう、もしかしたら初めての異性とのお出かけかもしれない。

そう思うと胸が高鳴るが、これはあくまでもさとりさんの買い物に付き合うだけ。

俺は何を考えているんだと頭を座席にぶつける。

「・・・何をしていますのですか？」

「あ、いや・・・何でもないよ。デパートまで少しだけ時間かかるから。眠いなら寝ててもいいよ」

信号が青になったと同時にアクセルを踏む。

車窓から流れる景色が珍しいのか、さとりはずっと外を向いたままだ。

俺はその姿が子供にしか見えず、またもや笑みを零してしまう。

我ながらこの状況を楽しんでいるのかもしれない。

そして、それと同時にこれが終わってほしくないという感情があったのかもしれない。

視線を前に戻したさとの手を無意識に掴んでしまう。

幼く華奢な手だが、人間独特の温かみを感じる。

思わずぎゅっと握ってしまう。

何をしているんだと自分に言い聞かせ手を離すが、温もりだけは逃げることはなかった。

さとりは驚いた表情でこちらを見つめている。無理もないだろう。

「あつと・・・ご、ごめん」

青信号になったと同時に、慌てて謝る。

車内に気まずいのか、それとも困惑したものなのか、そんな空気が漂っている。

結局、デパートに着くまで終始無言状態だった。

そう・・・懐いてはならない感情。

人間と妖怪の恋などあつてはならないこと。

さとりを妖怪と知らない啓祐には到底理解のできないこと。

「あの・・・」

デパートの駐車場に車を止め、横からさとりが話しかけてくる。

とても困惑した表情、無理もないか・・・

と、思っていた俺の推測は大きく外れた。

「あなたのこと、何と呼べばいいのでしょうか・・・」

今思ったが、俺は自分の名前をさとりに教えていなかった。

言われて初めて気付いたが、もし言われなければずっと名無しの状態でいくつもりだったのだろうか・・・

「あー・・・啓祐でも何でもいいよ」

「それじゃ・・・啓祐さん、で・・・」

顔を紅潮させるさとり。

それを横目で見つつ、シートベルトを外す。

デパートには仕事終えた父親と共に歩く家族連れ。

まだ初々しい新婚夫婦。

様々な人達が集う中、俺とさとりも店内へ歩き出す。

春の夕日が差し込む中、丁度良い温度の店内へ入る。

デパートだけあって店舗の数はかなり多い。

えっと、ファッション系は・・・4階か。

第四話 「禁断の恋」

結論から言おう・・・可愛いの一言に尽きる。

俺とさとりは4階にあるファッションコーナーへと足を運んでいた。様々な洋服店が並ぶ中、さとりが興味津々に見つめている店がある。可愛い子供服から大人っぽいクールな女性用の服が所狭しと並ぶ店主に女性の服を扱っているらしい。

「・・・見るだけ見てみるか？」

不意に話しかけられ驚いたのか、さとりは体を大きく震わせた。しかし、それ以上に興味があつたのか、コクリと小さく頷いて店内へ入っていった。

それを見届けた俺は壁際に設置されていたベンチに腰をかける。普段こういう場所に訪れることが無く、慣れない場所に戸惑っているのが現状だ。

辺りをキョロキョロと見回しつつ小さくため息をつく。

さとりは店内でおすめの服でも着させてもらっているのかな？

「デパートか・・・」

小さくボソリと呟く。

デパートと言えば家族連れが目立つのが普通だろう。現に俺の目の前を家族連れが数多く通り過ぎている。

お菓子を強請る子供、あれやこれを見て回る婦人。
しかし、これだけは言える。皆が楽しそうだと。

「あ、啓祐・・・さん・・・」

ボーとしている俺に声をかけるさとり。

店内物色が終わったのかと思い顔を上げてみた。

そこにはあのフリルのついた服のさとりはいなく、ただただ可愛らしい少女がいた。

色合いこそ元着た服と同じだが、少しアレンジを加えるだけで印象はガラッと変わってしまう。

思わず見惚れる俺に店員が声をかける。

「とてもお似合いですよ。どうですか？」

「え、ああ・・・いや・・・うん、似合ってる・・・」

不器用に返事をし、店員はニコニコと店内へ戻っていく。

さとりはこの先どうしたらいいのか分からず戸惑っているようだが・
・

「・・・その服買うか？」

その一言にコクンと頷いた。

買うと決まれば服を着替え、レジへ持っていく。

会計を済ませれば服を丁寧に紙袋に入れてもらう。

値段なんて気にしないでいい。そもそもさとりの住んでいた世界と
ことでは通貨が違ったらしいからな。

「よかったな・・・似合う服見つかった」

さとりは顔を俯けたまま……ただ紅潮させた顔を見られたくないだけなのか分らないが。

次に向かったのは日用品コーナー。

普通に必要な物として洗面用具など買わなければならない。

「やわらかめでいいかな？」

「はい……一番柔らかいので……」

どこかぎこちないがやわらかめと表示された歯ブラシをカゴに入れる。

歯磨き粉にタオルや切れかけのシャンプーなど……

会計を済まし、そういえばとファッション系のブースへ舞い戻る。

「寝間着、いるよね？」

そう言つてまたも先ほどと同じ店内に入る。

寝間着と言つてもスウェットやジャージみたいなものだが。

そういう類の服が並べられている場所へ移動し、その中から似合いそうなものを選んでみる。

さとりも自分で選んでいるようだが中々定まらないらしい。

無理も無い、俺も人の事を言えないが慣れない場所ではどうしても躊躇してしまう。

「んー……また店員さんに選んでもらう？」

コクリと頷いたさとりを確認し、どこかにいるであろう店員を呼びに行く。

そして俺は再びベンチへ……このベンチが何となく落ち着く。

真横にあつた自販機でコーヒーを買い暇つぶしとして飲み始める。買い物とはこれほどまでに楽しいものだっただろうか。

少なくとも俺の記憶にそんなものはない。

無くて当たり前だろう・・・

そんなネガティブな思考を何とか跳ね除け、再びこちらへやって来たさとりを見て見惚れてしまうのであった。

デパートでの買い物を終え自宅に帰ってきた。

外は既に日が暮れ、街灯と月明かりに照らされるのみとなった。

晩御飯は珍しく冷凍食品から脱した。

デパートの食品売り場で安売りしていた鶏肉を買い占め、今現在から揚げとして調理している。

熱した油の中に投入すれば後は上がるのを待ちつつクルクルと肉を混ぜればいい。

「から揚げって言うんですよね？」

「うん。美味しいよきつと」

自らの料理に自らが美味しいと言うのは少々抵抗があるが、これはあくまでもから揚げが美味しいという意味だ。

少しの時を過ごし、カラッと揚げたから揚げをペーパーを敷いた皿に乗せていく。

無駄な脂が徐々に吸い取られていく。これを吸い取らないまま食べるのは流石に無理がある。

「それじゃ食べよつか」

机から揚げ、白ご飯と並べていく。
今日買ったばかりの箸を握るさとりの姿は本当に子どものようだ。
そして向かい合わせに座り、

「いただきます」

の合図で食べ始めた。

一口食べ、我ながらいい出来だと舌鼓を打った。

晩御飯を食べ終え、隣り合わせに座りながらテレビを見ている。

お笑い芸人が持ちネタを披露する番組なのだが、正直大半がごり押しのようなつまらない。

中には心底笑わせてくれる芸人もいるのだが・・・

「あ、・・・少し席を離れますね」

そう言つて奥へ行くさとり。

俺は大して気に留めずにテレビを見ていた。

つまらない芸人がつまらない芸を披露する・・・これも世の理なのだろうか・・・

「あ、おかえり」

数分して戻ってきたさとりは隣にちょこんと座る。

トイレにしては早かったし、手でも洗ってきたのだろう。
先ほどと同じように隣り合わせに座りながらテレビを見る。
同じようになのだが・・・どこか違う。
そう、服装ががらっと変わっていた。

「着替えたの？」

と、問えば、

「はい・・・寝るときに着る物なので・・・」

と、返事が返ってくる。

あまりに似合い過ぎていて目に目が合わせ辛い。
可愛いと面と向かって言えるほどなのだが、生憎俺にそんな度胸と根性は無かった。

「その・・・似合って、ますか・・・？」

そのぎこちない質問に一枚上回るぎこちなさで答えた。

「・・・似合ってる・・・んじゃないかな。うん・・・いいと思うよ」

ぎこちなさが場の空気を余計にぎこちなくしてしまう。
決して重苦しいわけではないが、どこか固い空気だった。
まだ出会って2日目、お互いのこともよく分かっていない。
ましてやさとりはどこの世界の住人かも定かではない。
そんな相手に早くも心を許してしまっている自分がここにいる。
過去の経験と辛さ・・・
それらが連なり、そして今の状況がとても楽しく嬉しい。

誰かの温もりがあり、こうして誰かと一緒にいれる。
これが俺の思い描いていた人生なのかもしれない。
人の温もりを感じ、幸せに生きたい。

「さとり、さん……」

もし、もしの話だ。

さとりと共に人生を歩んだとすれば？

まだ出会って間もないが、俺は完全に心を許してしまっているのか
もしれない。

おかしい、早過ぎると思う人が大多数だと思う。

それでも、それでも……

「さとりさん！」

俺の叫びに驚くさとり。

そして、こちらを少し見据えるなり顔を赤め俯いてしまう。
何かを悟ったのだろうか……。いや、それでもいい。

俺は、一世一代の決断を下す。

「さとりさん、俺は……。あなたがす

時が止まったような気がした。

まさかこんなことになるとは思わなかった。

テレビの音なんて既に上の空。

俺は目を見開いたまま動かさない……。いや、動かせない。
閉じられた綺麗な瞳、ほのかに香る甘い匂い。

ぷにゅとした柔らかい感触、生温かい綺麗な唇。

誰がこんな幸せを想像しただろうか。

俺でさえ想像しなかった。

「ん．．．ぷはっ．．．．．」

まるでここは二次元なのか、そんな風にまで思われる。
俺とさとの口の唾液のアーチを描く。

何が起こった、そして何をした？

さとりとキスをした？それ以外に何をしたというのだ。

「．．．私の気持ちです。あなたが．．．啓祐さんが悪いのですよ．．．」

上目遣いでその言葉は反則だと心の中で叫ぶ。

まさか、まさか出会って2日でこうなると誰が予測した。

ぽっかりと空いていた俺の心に何かが埋まった、そんな気がした。

空いていた1ピースを埋めるかのように．．．

「私はいつまでこちらにいるか分かりません．．．けれど、ずっと．．．優しいあなたの傍にいたいです．．．」

遙か上空。

月明かりに照らされたその姿は月下美人。そのまま理解してもらえればありがたい。

優雅に舞う金髪の女性、夜に似合わぬ日傘をクルクルと回す。

「．．．あなたは大きな嘘をつき、そして大きな過ちを犯している」

誰もいない遙か上空で1人呟く。
田口啓祐の自宅を凝視しながら。

「人間と妖怪の恋など・・・認められないわ」

それは古くからの掟。

人間と妖怪が共存する為のパワーバランス。
それが崩される恐れがある。2人の禁断の恋。

「あなたは・・・全てを敵に回すつもりなのかしら・・・それを分かっているのしょうね」

女性の表情には美しいという文字は似合わない。
呆れ、怒り、理解に苦しむという表情。

「幻想郷を潰す者は許さないわ。どんな手を使ってでもあなたを元に戻す。抵抗するならば・・・殺す」

第五話 「旅行」

あれからというものの、俺の気持ちは浮かれたままだ。

美佐子の声もロクに耳に入らず、慶一のような扱いになってきたようにも思う。

それでもいいかと思ってしまうほど俺の気持ちは高ぶっていた。

今日の講義が終われば明日から2日間大学に行く必要が無い。

幸いバイトのシフトも入っておらず、俺はさとりにある提案を持ちかけてみた。

これは昨夜の出来事だ。

「旅行・・・ですか？」

一冊の雑誌を机に置きさとりに持ちかけてみた。

季節は5月、6月を通り過ぎて7月。

海が恋しくなる夏の到来だ。

「ここの旅館の飯が凄く美味しいんだ。夜の眺めも最高だし・・・
2人で行こう？」

まるで新婚夫婦のような衝動に揺さぶられる。

パンフレットには折り目や付箋は無い、まさにこの旅館だけに絞っていたかのように。

それもその筈だ。この旅館は去年美佐子と慶一と3人で泊まりに行った場所。

「ご飯も美味しく眺めも最高、そして女将さんの談話も腹が引っくり返るほど楽しい。」

これ以上に良い旅館なんてあるわけがないだろうと断言出来るほどだった。

「2人で旅行・・・その・・・私・・・」

顔を赤めながら俯くさととり。

そんなさとりとは対照的にウキウキ気分の俺がここにいる。

パンフレットを丸めて何となくブンブン振ってしまうのはよく分からないが。

「・・・・・・・・啓祐さんとなら・・・はい、行きたいです・・・」

これぞと言わんばかりに舞い上がる俺をじつと凝視するさとり。

無理も無い、こうして異性と旅行に行くなんて誰でも喜ぶことだ。

ましてや俺だ。友達以上の人と旅行に行くのは初めてかもしれないいつもはさとりに子どもものようだと言っているが、今だけは俺の方が断然子供のようにだった。

「それじゃ明後日から行こう！予約すぐに入れるからさ！予約予約！！！」

電話の子機を手に取り雑誌に書かれてある番号に掛ける。

電話の主の声は聞き覚えのある声。

受付の人は去年と同じで変わっていないらしい。

「・・・はい、はい。明後日の昼頃に・・・はい、はい！！！」

少しの確認を交え電話は終わる。

運良く部屋はまだ空いていたらしい。

「楽しみだな・・・楽しみだなおい!!」

「そんなにはしゃぐと怪我しますよ・・・」

呆れ顔のさとりだが内心は喜んでいるに違いない。

俺には読心術なんてものは無いのだが・・・

さとりにだってあるわけがないだろう。人間に人の心を完全に読むなんて不可能なのだから。

「・・・・・・・・」

さとりが唇を固く閉じる。

俺のはしゃぎっぷりに呆れてしまったのだろうか。

流石にはしゃぎ過ぎたと自重し、床に静かに座り込んだ。

そんなことがあって今は帰りの電車に乗っている。

美佐子と何通かメールのやり取りをし、明日から旅行に行くと伝えた。

「1人？」と聞かれたので「2人」と答えておいた。

「誰？」と聞かれたが「内緒」と答えておいた。

すると「そっか」と素っ気ない返事とともにメールのやり取りは終わった。

電車は目的の駅に到着し、俺は足早にホームを出た。

自宅までの道のりがこんなに楽しいと感じたことはあっただろうか。

無い、絶対無い。

「（とりあえず服と日用品と・・・あ、水着買いに行かないとな・・・）」

帰ったらデパートに行こう。

さとの水着を買わないと・・・

といっても俺は単なる付添いで、売り場に入るほどの度胸は無いのだが・・・

いや、そもそも入ること自体間違っているのかもしれないな。時には根性無しが役立つ時もあるらしい。

「と、家か・・・」

危うく通り過ぎそうになった自宅の階段を上る。

鍵のかかったノブに鍵を差し、ノブを捻る。

当たり前の動作で開いた扉の中へ声を発する。

「ただいま！」

誰も返事などしてくれないと思っていた。
でも、今は違った。

「おかえりなさい・・・啓祐さん」

紫髪の少女が出迎えてくれる。

まさに新婚の夫婦のようだが、これでも出会ってまだ2か月程度しか経っていない。

我ながら早くに馴染め、心を開けたと思う。

・・・もしかしたらお互いに境遇が似ているのかもしれない。

お互いに辛い思いをしてきたのかもしれない、だからすぐに心を開くことが出来たのかもしれない。

「そうそう、海に行くのだから水着買おう？デパート行こう！」

「み、水着ですか……………」

そわそわしながらもコクリと頷いてくれるさとり。

そうと決まれば早速出掛ける支度を済ませる。

俺は車のキーを棚から取り出し、免許書と財布をポケットに突っ込んだ。

さとりはそこまで手荷物は無い。

とりあえず外出用の服に着替え……あ、勿論俺は退室。

そしてアパート裏の愛車の下へ直行したのであった。

平日ともあって人は少ない方だと思う。

入り口付近に車を止め、少しは見慣れたデパートの中へ足を運ぶ。

同じ4階のファッションコーナーでも場所が違う。

服とは別に、夏になれば繁盛する水着のコーナーへ。

俺はいつものベンチに腰をかけさとりを待つことにした。

隣の自販機で缶コーヒーを買って。

「…………俺の水着ってあつたっけか」

押し入れのどこかに詰め込んだような記憶があるようで無い。
まあいいだろう、帰って探せばそれでいい。

今はさとりの水着が決まるのを待つだけだ。

「（さとりさんといえば紫かな・・・でもたまには別の色もいいかな・・・）」

俺の脳内で繰り返されるファッションショーは変態以外の何者でもなかった。

そんなことを繰り返しながら早30分。

1つの白い紙袋を下げたさとりが戻ってきた。

「良いの決まった？」

「は、はい・・・・・・店員さんのおすすめなのですが・・・・」

普通ならここで見せてと言つべきなのだろうが、楽しみは後に取っておきたい。

紙袋をまじまじと見つめつつ、駐車場に止めてある愛車の下へ戻ることにした。

日が暮れはじめ、徐々に月明かりが姿を現す時間帯。

ここで俺はつまらないことを思いつく。

「晩御飯さ、どこかで食べない？」

家族連れが集まるファミリーストラン、略してファミレス。その一角の席に座る俺とさとり。

慣れない場所に戸惑うさとりとメニューと睨めっこをする俺。

ファミレスは美佐子と慶一の3人で何度か来たことがある。
無論、ドリンクバーと何か軽い物を注文するだけだが・・・
こうしてご飯として来店するのは初めてかもしれない。

「やっぱステーキ辺りがいいな・・・サーロインか・・・うん、
これでいいや」

自分の注文する品を決め、後はさとりを待つだけだ。
俺以上にメニューと睨めっこを繰り返すさとり。相変わらず子供の
ようだ。

俺はそれをじっと、しかし楽しげに見つめていた。

「・・・メニューが多過ぎて決められません・・・」

ということらしいので俺が決めることになった。

さとりが好きそうなもの・・・よく分からないのが本音だが・・・
がつり系の肉はあまり好きそうじゃない、だとすれば軽い食べ物
だろうか。

かといっても軽い食べ物って具体的になんだろう？

そうこうして迷っているうちに時は進んでいってしまう。

結局、さとりは目玉焼きの乗ったハンバーグというものにしたらしい。
い。

注文ボタンを押し、やって来た店員に注文するメニューを・・・
・・・

「・・・サーロインステーキと目玉焼きハンバーグを1つづ
つ」

「無反応！？流石にへこむぞ」

店員なのだからしっかりしろと喝を入れてやりたくなる。
ファミレスの制服に身を包んだ慶一がそこにいた。
笑いたくなってしまう。

「さては彼女か？それとも新づ

俺の物凄い形相に慶一は言葉を詰まらせる。

怖いのか、それともこれ以上いくと後々面倒だからなのか分からないが。

とりあえず注文する品を言い渡す。

「・・・ま、旅行楽しんできなよ。お前にとっちゃ初めてのようなもんだろ」

こいつのこういうところには本当に感謝する。

親友っていいものだ、普段は馬鹿言い合ってもいざというときは助け合えるのだから。

「サーロインステーキと目玉焼きハンバーグね。すぐに持ってくるわ」

そう言つて厨房に入る慶一。

さとりはぼかんとした表情で俺の方を向いている。

「俺の親友の緒方慶一。馬鹿な奴だけど根は良い奴なんだ」

「親友・・・ですか」

さとの胸にちょっとしたもやもやが溜まる。

そつ、この時初めて味わった感覚。

もやもやが晴れずに溜まっていくような感じ。
初めての”嫉妬”

「さとりさん？どうかした？」

「あ、いえ・・・大丈夫です」

何も無いフリをしているのがバレバレだが、あえてそっとしておこう。

数分して注文した品が運ばれてくる。無論、慶一の手によって。

「俺のお手製料理を召し上げ」

「嘘つけ」

馬鹿の冗談はさっと流し、運ばれてきた料理に舌鼓を打つ。

さとりもハンバーグが気に入ったらしく次々に口へ運んでいつてい

る。
さあ、帰ったら旅行の準備だ。

綺麗な海に似合わぬ惨劇の旅行へと・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1976ba/>

光射す方へ・・・【東方小説】

2012年1月5日23時46分発行